

第1章 日台交流の歴史（大航海時代まで）

第1節 阿多隼人

漢王朝の時代に中華文明が確立した。中華文明においては、王朝の直接統治する領土があり、その周縁に間接統治のいわゆる朝貢国が存在するという地域構造になっている。

今私は、台湾に焦点を当てて日本との繋がりを書こうとしているので、問題になるのは福建省である。北方や西方は別として、福建省、広東省、江西省で見る限り、中国の版図は、漢の時代に確立された。秦の時代は、福建省、広東省、江西省地方の領土はまだ不安定であったのである。

沢史生の「閉ざされた神々」によると、中国の福建省から広東省の海岸に展開する海辺の民「蛮民族」は、もともと閩国（ビンコク、福建）の民だったが、秦の始皇帝によって蛮族として駆逐され、以後、海辺でかろうじて生息する賤民水上生活者として、実に21世紀に至る今日まで虐げられた底辺の生活を強いられてきたという。秦以降の歴代王朝もこの民族に対する「賤視差別政策」を中断することなく、彼らの陸での生活を決して許さなかった。したがって、彼らは常に海をさすらい、新天地を求めて島々を渡り歩き、遂に日本にも辿り着いたのである。その地が、南かごしま市である。これが世に言う「阿多族」であり、「阿多隼人」の祖先である。この阿多隼人については、私の論文「[邪馬台国と古代史の最新](#)」の第7章第1節に書いた。そこにも書いたが、今ここでの文脈で私の考えの要点を申し述べておきたい。

藤原不比等は阿多隼人並びに海人族のネットワークを恐れると同時に、阿多隼人を直轄の臣下にすることによって、全国の「アタ族」を統括したのだと思う。その主なものは熊野水軍と伊豆水軍である。白村江の戦いで、我が水軍の総司令官を勤めたのが伊豆水軍の流れを汲む庵原氏である。そういうことを不比等は十分知っていて、熊野水軍や伊豆水軍を大事にしたのである。それは、熊野神社や伊豆山神社を朝廷が大切にあつかつてきたのを見ても解る。伊豆山神社のその伝統は、鎌倉幕府まで続く。

そういうことを考えていると、私は、やはり日本は、海洋国家だなあと思う。阿多隼人の国、薩摩から、かの世界の名将東郷元帥が出たのも、当然のことだと思ったりする。

しかし、阿多隼人と大和朝廷との関係については、その論文に書かなかった。そこで、ここでは、阿多隼人と大和朝廷との関係について詳述しておきたい。

奈良県立橿原考古学研究所は2004年12月14日、高取町薩摩で古墳時代前期と中期の古墳群が出土したと発表した。周辺で遺跡が確認されたのは初めてで、地名から薩摩遺

跡と命名した。国内では似た例のない文様を描いた国産の銅鏡が見つかるなど副葬品は豊富で、同研究所は「和歌山と大和を結ぶ「紀路」が古代の重要ルートだったことを裏付ける遺跡」とみている。（ <http://inoues.net/club2/morikasidani.html> より）

[隼人研究室というホームページ](#)によると、『 奈良県高取町の「薩摩」が「阿多隼人の薩摩と関係あるのかないのか」の疑いは、そこの近隣に「兵庫・吉備・土佐」など、古今を通じて有力な国の名が集落名として連なることから疑問の余地はない。』との事であるが、私も同感である。

「紀路」の西の出口（奈良県五條市）にあたる住川遺跡では、やはり古墳時代初頭に墓地が形成されており、それは東の出口（奈良県高取町）にあたる薩摩遺跡と対をなしている。また、古墳時代中期には和歌浦より紀ノ川を遡り、この「紀路」を經由して、中国大陸や韓半島から渡来した人・物・情報が大和へ入ってきたことが推定されている。つまり、「紀路」は古墳時代の国際交流を支える重要なルートであったのである。薩摩遺跡における豊富な内容をもつ古墳の存在は、そのことを裏付ける重要な証拠である。

奈良県五條市に 阿陀比賣神社がある。

祭神は、阿陀比賣神（[コノハナノサクヤビメ](#)）、[彦火火出見尊\(ヒコホホデミノミコト\)](#)である。[その由緒書きによると](#)、次の通りである。

『和名抄』の大和国宇智郡阿陀郷の名が見える。当社の鎮座地である。また『和名抄』に、薩摩国阿多郡阿多郷の名が見える。**阿多隼人の居住地である**。開聞岳を神奈備山としていた隼人である。なお、隼人には大住隼人もいる。こちらは人数が多いようだ。

阿多隼人は少数派だが名門で『記紀』では皇室に妃を出している。当神社の祭神の阿陀比賣神とは神阿多都比売、または木花佐久夜姫命と言ひ、まさに皇室の祖先の母親とされている。

吉野川は南方漁法の鵜飼が行われていた地域であり、薩摩から移住の者が地名、魚法、祭神を持ち込んだものと見て差し支えはなさそうだ。大三元さんに教えていただいた「日本の地名」（谷川健一著）には鵜のことを沖縄では「アタック」と呼んでいたとの紹介があり、明治十四年に上杉県令が沖縄本島を巡察した際に地元の人が、鵜のことを「アタック」と言ったという記録が巡回日誌にとどめられている。

さて、当地は、吉野と宇智の境にあたる。大きくは大和と紀伊、畿内と畿外の境、サカの地である。サカの守りとして隼人を置いたとも思われる。

以上の通り、大和朝廷は、その守りのために、現在の和歌山県と奈良県の県境附近、つまり奈良県五條市と高取町附近に阿多隼人をおいたものと思われる。すなわち、阿多隼人は、外敵から大和朝廷を守るといふ重大な職務を負っていたのである。外敵とは、中国水軍であろう。私の考えでは、大和朝廷の防衛に阿多隼人を当たさせたのは藤原不比等の深慮遠謀によるもの」と思われる。藤原不比等は、中国水軍の朝鮮半島からの来襲の他に、福建省からの来襲を恐れていたであろう。

なお、阿多隼人に端を発する薩摩隼人は、その呪力によって天皇をお守りしていたことが知られている。

「延喜式」巻28（隼人司）には、元日・即位・蕃客入朝などの大儀には、「大衣2人、番上隼人20人、今来隼人20人、白丁隼人132人が参加した」と記されており、遠従の駕行には、「大衣2人、番上隼人4人、今来隼人10人が供奉した」とあり、隼人の呪力が大和政権の支配者層に信じられ、利用されていたと見られている。井上辰雄らは、**狗吠**（犬の鳴き真似）行為や身につけている緋帛の肩巾（ひれ）や横刀が、悪霊を鎮める呪声であり、呪具であった事を明らかにしている。

日本はいうまでもなく邪馬台国の時代から大和朝廷の時代を通じて中国の朝貢国であった。しかし、大和朝廷の認識としては、南さつま市のあたりは、中国の領土ではないものの、中国の影響を強く受ける地域であり、中国軍の攻めてくる心配があった。

白村江の戦いに完敗した日本は北部九州と瀬戸内海沿岸の防備を図るが、さらに藤原不比等は、薩摩隼人の懐柔を図る。それによって、薩摩隼人が中国水軍と連合して大和に攻め上るといふ心配は無くなった。

しかし、薩摩隼人と福建省や台湾の人々との交流がなくなったわけではなかろう。私は交易目的の往来は続いていたものと思う。時代は流れ平安時代になると、にゃんにゃん（媽祖）信仰が日本にも及ぶことになる。

第2節 にゃんにゃん

にゃんにゃん（媽祖）は宋代に実在した官吏の娘、黙娘が神となったものであるとされている。黙娘は建隆元年（960年）、福建省興化府の官吏林愿の7女として生まれた。幼少の頃から才気煥発で信仰心も篤かったが、16歳の頃に神通力を得て村人の病を治すな

どの奇跡を起こし「通賢靈女」と呼ばれ崇められた。しかし28歳の時に父が海難に遭い行方知れずとなる。これに悲嘆した黙娘は旅立ち、その後、[峨嵋山](#)の山頂で仙人に誘われ神となったという伝承が伝わっている。

なお、父を探しに船を出し遭難したという伝承もある。福建省にある媽祖島（現在の[南竿島](#)とされる）に黙娘の遺体が打ち上げられたという伝承が残り、列島の名前の由来ともなっている。その伝承が日本にも伝わったのであろうか、南さつま市にはにゃんにゃん（媽祖）の遺体が打ち上げられたとの伝承がある。

媽祖信仰の盛んな浙江省の舟山群島（舟山市）には普陀山・洛迦山があり渡海祈願の神としての観音菩薩との習合現象も見られる。もともとは天竺南方にあったとされる普陀落山と同一視された。

媽祖は[千里眼](#)（せんりがん）と[順風耳](#)（じゅんぷうじ）の二神を脇に付き従えている。この二神はもともと悪神であったが、媽祖によって調伏され改心し、以降媽祖の随神となった。

媽祖は当初、航海など海に携わる事柄に利益があるとされ、福建省、潮州など中国南部の沿岸地方で特に信仰を集めていたが、時代が下るにつれ、次第に万物に利益がある神と考えられるようになった。歴代の皇帝からも媽祖は信奉され、元世祖の代（1281年）には護國明著天妃に、清代康熙23年（1684年）には天后に封じられた。媽祖を祀った廟が「天妃宮」、「天后宮」などとも呼ばれるのはこれが由縁である。媽祖信仰は、福建省・潮州の商人が活動した沿海部一帯に広まり、台湾をはじめとする多くの港町に媽祖廟が建てられた。台湾においては、この媽祖信仰は日本統治時代末期に台湾総督府の方針によって一時規制された。なお台北最大規模だった「天后宮」は1908年に台湾総督府により撤去され、かわりに博物館（現 国立台湾博物館）が建てられた。

日本統治の終了後は再び活発な信仰を呼び、新しい廟祠も数多く建立されるようになった。なお毎年旧暦の3月23日は媽祖の誕生日とされ、台湾全土の媽祖廟で盛大な祭りが開催されている。

こうして広まった媽祖信仰であるが、中華人民共和国政府は「迷信的・非科学的な活動の温床」ととらえ、厳しく規制した。特に文化大革命期にはほぼすべての廟祠が破壊され、信者も迫害されたが、改革開放の進展とともにこうした規制は次第に曖昧になり、80年代終わり頃から廟祠の復興が黙認されるようになった。

以上の通り、海辺の民「蚤民族」（アタ族）が祀りすがった神が「にゃんにゃん」である。正式には「**媽祖（まそ）**」または「娘媽神女」で、別名「天后」「天妃」ともいう。

この神は、海を放浪するアタ族のために、自ら海中に身を投げて航海の安全を祈ったという伝承を持ち、南は海南島からマカオ、台湾、日本に至るまで、広く祀られている。

日本の場合、この神の溺死体が漂着したとされているところが南さつま市の野間岬である。野間岳の中腹にある「野間神社」の由緒書きには「娘媽」の死体が野間岬に漂着したのでこれを野間岳に祀ったと記されている。

「娘媽」は「ノーマ」または「ニャンマ」と読む。媽祖（まそ）すなわち「にゃんにゃん」は、まったく道教の歴史と関係がないのだが、アタ族や華僑にとっては正真正銘の道教の神なのである。

日本の媽祖廟としては[横浜媽祖廟](#)が有名であるが、媽祖は日本在来の船玉信仰や神火靈験譚と結び付くなどして、古来、各地で信仰されるようになった。

江戸時代以前に伝来・作成された媽祖像は、[南薩摩地域を中心に現在30例以上確認](#)されている。江戸時代前期に清より来日し、水戸藩二代藩主徳川光圀の知遇を得た東臯心越が伝えたとされる天妃神の像が、[茨城県水戸市の祇園寺](#)に祀られている。また、それを模したとされる像が、[北茨城市天妃山の弟橋姫神社、大洗町の弟橋比売神社（天妃神社）、小美玉市の天聖寺](#)にも祀られている。

[青森県大間町の大間稲荷神社](#)には、天妃媽祖大権現が祀られている。元禄9年に大間村の名主伊藤五左衛門が水戸藩から天妃（媽祖）を大間に遷座してから300周年を迎えた1996年（平成8年）以降、毎年海の日に「天妃祭」が行われている。この大間稲荷神社は台湾の媽祖信仰の総本山である雲林県の北港朝天宮と姉妹宮である。

[2000年（平成12年）以降、長崎市の長崎ランタンフェスティバルにおいて、長崎ネットワーク市民の会の企画運営で「媽祖行列」が行われている。](#)興福寺に媽祖をお迎えすることで祭りが始まる。

また、[沖縄県八重瀬町港川にあるうたき](#)、唐の船うたき(とうのふにうたき)は、かつてその地に難破した中国の貿易船の船員が建てた祠であり、媽祖が祀られている。

第3節 和寇

倭寇の歴史は大きく見た時に前期倭寇と、過渡期を経た後期倭寇の二つに分けられる。

倭寇の構成員は、前期倭寇では主に日本人で一部が高麗人であり、後期倭寇は中国人が多数派で一部に日本人をはじめ諸民族を含んでいたと推測されている

前期倭寇が活動していたのは14世紀、日本の時代区分では南北朝時代から室町時代初期にあたる。日本では北朝を奉じて室町幕府を開いた足利氏と、吉野へ逃れた南朝が全国規模で争っており、中央の統制がゆるく倭寇も活動し易かった。

中国では1368年に[朱元璋](#)が明王朝を建国し、日本に対して倭寇討伐の要請をするために使者を派遣する。

室町幕府将軍の足利義満が1392年に南北朝合一を行うと、明との貿易を望んだ義満は、明に要請されて倭寇を鎮圧した。倭寇鎮圧によって義満は明朝より新たに「日本国王」として冊封され、1404年（応永11年）から[勘合貿易](#)が行われようになる。

朱元璋は、福建省に16個の城を築城して1万5千の兵と軍船100隻をおき、浙江省には59の城を築城して5万8千の兵をおき、広東省に軍船200隻をおいて防備を固めた。

日本では1523年に勘合を巡って細川氏と大内氏がそれぞれ派遣した朝貢使節が浙江省寧波で争う[寧波の乱](#)が起り、勘合貿易が途絶すると倭寇を通じた密貿易が盛んになり、さらに中央で起こった応仁の乱の為、再び倭寇の活動が活発化する事になる。

後期倭寇の構成員の多くは私貿易を行う中国人であったとされる。日本人は少ないながらも指揮官的立場にあり、当時日本が戦国時代であったことから実戦経験豊富なものが多く、戦闘の先頭に立ったり指揮を執ることで倭寇の武力向上に資していたことがうかがわれる。

1547年には明の将軍である朱紘が派遣されるが鎮圧に失敗し、53年からは嘉靖大倭寇と呼ばれる倭寇の大規模な活動が始まる。こうした状況から明朝内部の官僚の中からも海禁の緩和による事態の打開を主張する論が強まる。

それ以降、明王朝はこの海禁を緩和する宥和策に転じ、東南アジアの諸国やポルトガル等の貿易を認めるようになる。ただし、日本に対してのみ倭寇への不信感から貿易を認めない態度を継続した。倭寇は1588年に豊臣秀吉が倭寇取締令を発令するまで抬頭し続けた。

そのころの日台交流でよく知られているのは、文禄2（1593）年に豊臣秀吉が使者を台湾へ送ったことである。

しかし、この秀吉の目的は達成されなかった。なぜなら、当時の台湾には主権者たる「国王」がおらず、各地方の代表者といえば各集落の首長であり、国書の受け渡しなどできる状態ではなかった。

それでも日本政府は台湾との接触を試み続けた。それを裏付ける二つの記録が残っている。ひとつは、山田長政がシャムへ行く途中に一時台湾に停留していたという記録。もうひとつは、泉州堺の商人・納屋助左衛門（呂宋助左衛門）が文禄3年に台湾で奇利を博し、日本に帰って秀吉に謁見して珍品を献じたという話が「三才図会」にある。

また、秀吉の逆鱗に触れた助左衛門は、「桜丸」号にて琉球へ逃れ、慶長元（1595）年に台湾の淡水に寄港したという記録が残っている。さらに彼には、慶長16年にはシャムへ渡るため、台湾内を探険したという記録もある。

江戸時代に入った慶長13年、徳川家康は日本に漂着した台湾のアミ族を駿河で引見した。家康の命を受けた有馬晴信は、部下を台湾に送ってまずは視察をし、原住民を撫順してから通商を試みたが、結果は失敗に終わる。元和元（1615）年、今度は長崎代官・村山等安が高山国の朱印状を得ることができた。村山は人を集めて台湾へ渡り、日本との貿易と入貢を求め、ひそかに台湾占有を狙ったのだが、有力な後援を得られずにこれまた失敗した。

その後の1624年以降、台湾南部はオランダ人に領有され、1626年以降、台湾北部はスペイン人に16年間も領有される。

オランダ人の記録によれば、日本の朱印船が南海で活躍していた時代、朱印船は基隆、淡水、安平、高雄も訪れており、各港には日本人街ができていたらしい。

倭寇時代から、オランダ人が台湾を領有した時代までの日台関係は、人的ではなく物的な関係が主流であった。八幡大菩薩の幟を掲げていた八幡船や御朱印船は、甲冑、刀剣、塩、漆器、扇子、生活雑貨を台湾へ積み出し、金、鉛、生糸、絹織物、鹿の皮、ガラス、黒檀などを台湾から日本へ持ち帰っている（ただ、台湾は貿易の中継地として利用されていただけで、この当時の台湾には甲冑など必要なかった）。

第1章全体の目次

第1節アタ隼人

第2節にゃんにゃん

第3節 倭寇